

はじめに

大谷大学短期仏教科で、若い学生さんと一緒にいつも親鸞聖人のおことばに、学ばさせていただいております。一楽と申します。

大阪教区の定例学習会に何回かご縁をいただいたことがきっかけで、近畿連区坊守会研修会にもご縁をいただくことになりました。定例学習会では親鸞聖人の『一念多念文意』を順に拝読していく形で学習させていただいています。今回の事前学習会と三月の一泊研修会にむけてのテーマとして、「如来よりたまわりたる信心」ということが掲げられております。『一念多念文意』を中心に、親鸞聖人がおっしゃるご信心についてお話をさせていただきました。と思います。

目次

救いとは何か	一
なぜ念仏なのか	四
ただ念仏せよ	一九
本願の眼	二三
本願を聞く	三〇

救いとは何か

如来よりたまわりたる信心」といふ言葉は『歎異抄』に出るおことばです。条文で言いますと、第六条といわゆる後序に出ています。後序を見ますと、法然上人の信心と親鸞の信心とは一つだといふことを、親鸞聖人がおっしゃっています(眞宗聖典六三九頁)。

今、この御物語について詳しく見ていくことはできませんが、親鸞聖人と先輩の弟子である勢観房・念仏房といふ人たちの間に、議論のあったことが伝えられています。親鸞聖人は「善信が信心も聖人の信心もひとつなり」とおっしゃいました。つまり、信心といふのは私においてもお聖人様においても、同一だといふことをおっしゃったわけです。それに対して先輩のお弟子たちは「そんなことがあるはずがないじゃないか」と言います。そこで親鸞聖人は「法然上人の智慧や才覚が広い事に一筋だといふならば、それは確かに間違いでありません。しかし、往生の信心においては全くことなることとなり、ただひとつなり」とお答えになります。それでも先輩方は納得しません。『どうしてそんなことが言えるのか』と言って、法然上人の前に出て、「この是非はつきりさせましよう」といふことになったわけです。法然上人はたつたひとことで源空が信心も、如来よりたまわりたる信心なり。善信房の信心も如来よりたまわらせたまいたる信心なり。されば、ただひとつなり」とおっしゃ

いまうた。

「この勢観房・念仏房といふ人たちは、法然上人のもとで長く教えを聞いてこられ、きちんといただいておるといふ自負の思いがあったと思います。それに対して、最近入ってきたあなたの信心が、どうして法然上人の信心と言えるのか」とおっしゃるわけです。つまり信心とは、人間の能力や、どれだけ学んだか、どれだけ仏教の言葉について理解を持っているか、そういうことが信心の深さを決めると思っておられたのでしよう。しかし、親鸞聖人は「往生の信心」とおっしゃいます。私なりに言うてしまいますが、人間が迷い苦しむ、お互いが傷つけ合っていくといふことを超えていく、それを親鸞聖人は往生の信心と言ってくださっていると思います。それは誰においても同じであると言われたのです。そのことをまさに証明してくださるかのよつに、源空が信心も、如来よりたまわりたる信心なり。善信房の信心も如来よりたまわらせたまいたる信心なり。されば、ただひとつなり。別の信心におおわしますとひととは、源空がまごころを浄土へなすまごころを授けたまひつらむわじ」とおっしゃったわけです。これは、信心が別だとおっしゃるならば、私が行いつつといっている浄土は、「私が生まれようといっているお浄土」には行くはずがありません。とまでおっしゃいました。

「往生浄土は、これは要するに人間の救いを意味していると思います。人間にとつて何が救いかといふことです。信心は誰においても同一であり、信心が違つて言ひなれば、私が救われていふこととするあり方とは全然違つたことを目指している」と、法然上人はおっしゃいます。ですから何によつて救

われていくのか、それが「如来よりたまわりたる信心」といつ言葉で押さえられているのです。その救いとは何かと「いつ、いつかは浄土」といつ言葉でいわれています。「これは現代の私たちにとつてもなかなかほつきりしないのではなないでしょうか。昨今いろいろな宗教がはやっています。どの宗教も救いといいつつとは必ず言います。ただ、いろんな救いがあるのではなく、結局は自分の要求に合うようなものを救いと思っただけです。」

ところが浄土といつのは何によつて救いが成り立つかといつと、『歎異抄』では如来よりたまわりたる信心「によつて往生する」と言つ。たまわつた信心によつて救われると言っているわけです。救いとは何か、その「いつ、いつかは」その救いが実現するのか「その問題が」の物語で言われているように思います。

法然上人は比叡山ですつと学ばれた方ですが、山を下りて吉水に草庵を結び、ただ念仏の教えを説かれた方です。ただ念仏の教えを選びとられて、それ以外の行は人間の救いを実現することにはならないと捨ててしまわれました。人間が苦しんだり、お互いに傷つけたりすることを超えていく道はただ念仏にある、といつことをおっしゃつてくださったのです。ところが、その大事さがなかなか伝わりませんでした。なぜなら、念仏は大変低いもののように見られていたからです。つまり修行するのが止続な仏道であつて、修行できない者のために念仏といつ程度の低い仏道がある、といつ見方が常識になっていました。現代でもこの発想が強いのではないのでしょうか。「なぜ念仏なのか」、これが法然上人がいらつしやる時でもなかなかほつきりしなかつたわけです。ここに親鸞聖人の大事なお仕事があります。

なぜ念仏なのか

なぜ念仏かといつことは、つまり、仏教とは何かといつ話です。それを二つの視点から申し上げたいと思いますが、一番大きいのは釈尊觀の違ひであります。これが法然上人、親鸞聖人の仏教と、それ以外の仏教との大きな分れ道です。親鸞聖人からみれば、釈尊は大いに悩まれた人間です。もちろん私たちに教えを説いてくださったお働きといつ意味で仏さまですが、私たちとは別の、何か特別なスーパーマンといつ意味ではありませんね。釈尊が救つてくださったわけではなく、釈尊が目覚めた世界、これを法といいますが、その法によつて救われていくわけです。もう少し言いますと、本当に大切なことが見えないから迷つている、これは法則的です。また本当に大切なことを見えれば、迷いや苦しみを超えていくことができる、これも法則的だと教えてくださったのがお釈迦様です。ところが多くの仏教は、お釈迦様によつて助けていただくといつ思いが強いのです。

親鸞聖人と同時代に明恵上人といつお方がおられます。この方は日本に生まれたことで、お釈迦

様の二千年もあとに生まれてしまったことで非常に苦しんだ方です。つまり、お釈迦様に会うか会わないかが自分の救いを決める条件のように思っておられたと言っても過言ではないと思います。しかし、親鸞聖人はそうはおっしゃいません。確かにお釈迦様に会えなかったことは悲しい事でありますが、お釈迦様は自分が「亡くなった後にも成り立つ仏道を、きちんと教えとして残してくれたさうしているのです。だからお釈迦様に会うか会わないかが救いを決めるのではなく、お釈迦様の残した法の世界、その法に出会うことが救いにあずかることなのだと思われたいです。お釈迦様亡き後でも成り立つ仏道、ここに立ったのが法然上人・親鸞聖人の仏道の、大事な伝統です。私を救ってくださる救世主など、どこにもないとはいっていいです。救世主は不要だと言える教えがちゃんとあるわけですね。現代でも救世主待望論というのが大はやりで、いろいろな矛盾が起きれば起きるほど、私たちを救ってくれるスーパーマンは現れないかと待っています。そういうものを待つ必要がないという道を明らかにしてくださった、これが親鸞聖人の大事なことなのです。

もう一つは人間観の違いです。聖道の仏教では無常なるいのちを生きているというところが、往々にして見落とされていくんです。修行は、いつまでやれば悟りに辿り着くか、救いにあずかるのかは保障がありません。ところが生きていく命はいつ果てるかわかりません。そういう中で、現在の私の問題にどう答えてもらえるのか、これが比叡山の修行では見えなかったのが、非常に大きな問題として親鸞聖人にはあつたと思います。大変有名なお言葉なのですが、教行信証の中に引用しておら

れます『楽邦文類』の言葉に「つかがえます。『ああ夢幻にして真にあらず、寿夭じゆうてうにして保ちがたし。呼吸の頃に、すなわちこれ来生なり、一たび人身を失ひければ、万劫にも復せず。』の時悟らずば、仏もし衆生をいかがしたまわん。願わくは深く無常を念じて、いたすらに後悔を貽おこすことなかれ」といふ文章です。人生は夢幻の如く真といえない。いのちは「天」、「これに」もろし」と親鸞聖人は左仮名を付けておられますが、いのは大変もろくて保つことは難しいといわれます。いつ息が絶えるか、これは誰にも決められません。しかも、誰もが必ずそういう形で果てていくわけです。そしてひとたび人間としてのいのちを失ったならば、どれほど長い時間をかけても再び戻ることはありません。ですから「この時悟らずば」と言われます。人間として何が大事かとはいっていい、そのことに目を覚まさないならば、「仏もし衆生をいかがしたまわん」、「これは仏さまでもどうすることもできない」といふ意味です。仏さまがいるから大丈夫だといふのではありません。今、目覚めないといけないのは私たちです。目覚めないものは仏さまでも助けることはできないといふのです。ここまでは生きてもいかに甘いな甘いな舞を抱いていて、結局何をしていたのか分からず、後悔や空しさだけが残るような人生になってはいけません。ここにいふ言葉です。ここに親鸞聖人がずっと引きずっておられた課題をつかがうことができると思います。

ちやちよすると私たちが人生がいつまでもあるように思い、本当に急がなくてはならないことをかえって後回しにすることがあります。十年・二十年後の人生設計も大切ですが、自分の思い通りに

十年後・二十年後がやってくるわけではありません。だからといって今さえ良ければ良いという話でもありません。一生かけてでもこれだけはやりたいというものを、今見つけなさいというお言葉だと思います。本当にいっ果てるかわからないが、今日のち終わると言われてもやめるわけにはいかないうつな、一人ひとりの仕事をもっているのです。それに目覚めよというお勧めだと思えます。そういう仕事に私たちが出遇うことが本当の満足なのではないでしょうか。十年後・二十年後の設計をして一生懸命やっているつもりですが、その通りにならなかつたら後で悔やみますよね。こんなことならもっと別のことをしておくんだったと、その時になって言っても、もう間に合いません。

無常という事実、仏教に縁をもっておられる比叡山の人たちが知らないわけではないのですが、自分たちは仏道を歩んでいるという自負のために、その事実を忘れていくのです。そして実際の人間の苦しみ悩みにどう答えていくのかが見えなくなっていくのです。「これが人間観の違いの一つの問題です。ところが見えなただけでなく、実際にはいろいろな序列を生むことにすらなっていました。これが親鸞聖人の一番ひっかかったところだと思います。

親鸞聖人の伝説で実際の出来事であったかは確かめられませんが、二十六歳のこととして『親鸞聖人正明伝』が伝えているエピソードがあります。親鸞聖人の抱えておられた課題をよく示しています。京都で用事をすませた親鸞聖人が比叡山にお帰りになろうとしたとき、山の麓の赤山明神で女の人に出会われます。その女の人がおっしゃるには、私はかねてから伝教大師を尊敬しております。まして、一度比叡山にお参りしたいと思っていました。道が分からないので案内してほしいというわけです。親鸞聖人は「あなたも知っていると私が比叡山は女性が入れないんだ」と答えます。「結界」と言って、女人はここから入れないという境を作って、その中だけは穢れのない清浄な区域であると言っていたのです。女性がいると修行ができないという、女性のせいにしてきたわけですが、実は女性がいて修行ができないのは男の方の問題です。だから結果の中に逃げ込んで、女性を遠ざけその中だけは修行がしやすい状況を作っていたわけです。それに対してこの女性は見事です。「それはおかしいんじゃないですか、伝教大師が教えてくださった仏教というのは、生きとし生ける者はみな成仏する平等の教えだと聞いております。なぜ女は登れないんですか。しかも、山には獣の雌、昆虫の雌もいるでしょう、なぜ人間の女だけが登れないんですか」と言います。この物語の中で、親鸞聖人は一切答えることができませんでした。女の人から玉を一つ貰うんですが、それはこのことを忘れないでくださいという課題を貰ったことを意味しています。「これは実際にあった話かはわかりませんが、後々の親鸞聖人のお書きものから見ていくと、充分有り得るといっつか、課題にしておられるのです。平等の救いということを親鸞聖人は尋ねていかれるわけですから。

このように、無常という事実を忘れて修行に励んでいるつもりになると、どの辺まで修行ができたか、今度は自負するようになり、修行していない者、山にすら登れない者といっふうに人間に序列を付けていくという事が起りてくるわけです。人間を解放するはずの仏教が、逆にいろいろな形で

人間を縛っていくことになっているわけです。これが親鸞聖人にとって大変大きな疑問だったと思います。修行して悟りを開いていくことはきわめて真面目な世界ですが、そこに「見落とされているのは、そいつの修行ができる者とできない者とが、何によって決まるのか」ということです。

これは後々の親鸞聖人のおことばですが、人間は業縁を生きているという人間観をお述べになつていかれます。どいつの事かといえます。比叡山で修行している人は、自分は真面目でたくさんのお経を読み、修行の段階も上がってきたと思っています。ところが実際は、どれほど仏道を求める心があっても、貴族の家柄に生まれない人は登ることさえ許されていないという状況がありました。また、生き物を殺す事をなりわいとする人たちもだめだと言われました。また、男でなくてはいけないとか、修行のできる体がないといけないとも言われるのです。しかし、よく考えて見れば、体についても自分で作ったものじゃないですね。男に生まれたとか、貴族に生まれたとかいっても、決して素質ではありません。たまたまいろいろな縁が重なってそつなただけです。字が読めるというのでも、そつな境遇はたまたまたどいつ話です。個人の能力の話ではないわけです。これが業縁といふことになり、ぶつかっていた大きなところだと思えます。つまり、比叡山の仏教とは、一切衆生が平等に成仏するといふ理念はあるんですが、実際に広がりを持たなかったのです。いろいろな条件が整った特定の者だけの仏道になってしまっていたわけです。親鸞聖人が山を下りられた根本の原因はこの辺にあると思えます。

平等の成仏をとる比叡山の仏教が、実際には生きて働いていなかったのです。それはたまたますたれているのではなく、本質的に一切衆生の平等の救いが成り立たない構造を持っているのです。人々を救うといふ看板を掲げて、人々を絡めとっていくという構造を持っているのです。たとえば、女性に対してどつだったかといつと、山に登って修行をするわけにはいかないが嘆くことではない、女性には女性用の道がある、仏さまのお慈悲は有り難いだろうと言つわけです。一旦は除外しておきながら、また絡めとっていくわけですね。いつてみれば悪人の救済といふことは、法然上人、親鸞聖人だけではなく前からもすでに言われていたのです。大事なのは、悪人あるいは女人に特別な道があるといふのが比叡山、旧仏教の救いの理論でありました。それに対して法然上人、親鸞聖人の言う悪人、女人の救済といふのは、どんな縁によつてどんな生き方をしている者も平等に救われる道です。どいつの境遇に自分になつてもなお仏道を歩む、それによつて救いを得ていくことは成り立つのだと、「これを明らかにしたのが法然上人、親鸞聖人の大事なお仕事だと思えます。どんな生きざまをする者も平等に助かつていく道があると言つてくださったのです。修行できない所にも成り立つ仏道がないと、親鸞聖人自身も救われなかったのです。

親鸞聖人は大変性欲が強く山を下りたとよく言われます。ところが「愛欲の広海」といふ場合の愛といふのは、別に性愛だけではありません。正信偈の言葉を借りれば、「貪愛瞋憎」とおっしゃいます。むねぼりといふ意味の愛です。決して異性、女性への愛といふことだけではありません。本当

に女性と一緒に生活をしたいというだけなら、比叡山に居ながらしている人もあったのです。山を下りるといふことは、明日から食べいくことも住む場所もなくなるわけです。

また、比叡山が権力争いの場所になっていて、道を求める親鸞聖人にとっては堪えがたかったと言われる事もあります。これも不十分だと思います。もしそうならば、権力争いを離れてひとり静かに学びを続ける隠遁といふ道もあるのです。何も下山する必要はないわけです。この意味で、修行して証りを得るといふことに対して根本的な疑問をもっていたと考えざるを得ません。

親鸞聖人が法然上人をおして出会った教えといふのは、お釈迦様がいらっしやらない所にも成り立つ仏道であると同時に、救世主を待つ必要もないわけです。いつの時代でも成り立つ仏道、しかもどんな人間においても成り立つ仏道です。これを求めて法然上人に出会われたといふことがよくわかります。その時、法然上人の説いてくださった念仏とは何かといふ事です。なぜ、念仏が一切衆生の平等の救いを実現するのか、ここが大事になると思います。

梅尾の明恵上人といふ方は、この「ただ念仏」の教えに真つ向から批判を加えた方です。法然上人が生きておられるときは、『選択集』といふ書物がまだ出ていませんでしたので、吉水の教団がいろいろ問題を起すのは、弟子たちが悪いに違いないと思っていたのです。ところが法然上人が亡くなられて『選択集』が出たとたん、これは仏法ではないと、猛烈な批判を加えられました。その中心は『選択集』には、ただ念仏といふことだけを言い、菩提心を捨てるという過失をおかしている。ところ

が菩提心といふのは道を求める心、悟りを求める心であって、これを捨ててしまつたら仏教であることと自体が成り立たないではないか。まず菩提心を起して念仏もし、さらに高度な修行を重ねていくべきである。これが明恵上人の批判です。ここには仏教観の違いがありますね。

法然上人は、念仏だけが救いを実現する行だとし、他の行を全部捨ててしまわれました。これを諸行や余行といふ言葉でおっしゃいます。それはなぜか。このあたりを往々にして勘違いすることがあります。たとえば、山を歩く修行、座る修行、護摩を炊く修行などなくても、念仏だけならば自分にもできやすいし、簡単だと考えると、これは法然上人が否定なさった諸行の一つです。

法然上人のおっしゃる念仏とは、ある意味で私たちの出発点をほきりしていくといふことです。私たちは仏教を学んでいること、仏道の入り口にたつていふこと、自明のこととしていくべきです。しかし、出発点が決まるのが一番の問題なのです。決まっているのかどうか問い返してみたらどうでしょう。歩んでいるつもりであっても、それは仏道でしょうか。聞法して段々と深まっているつもりになっているとすると、さっき言いました比叡山の修行と同じことになっているのです。私は一生懸命浄土真宗のおみりを学んでおります。もう何年もたちましたから、だいたいん經典のことばも憶えましたと。そうすると、今度は經典を知らない人を見下していくようなことが起るわけです。また、序列を作っていく、なまじき言った比叡山の仏教と同じ構造になっていきます。これを否定し

しいと言っている人でも、自分の病室に四番と書いていたら変な気がするものです。「こには結局念仏といふことが抜け落ちていくのです。それを親鸞聖人は「これはひとえに、自力をたのむ」とおっしゃいますね。ひとえに自力を頼むといえます。

まづ「この別解のほうには、念仏をしながら、他力をたのまぬなり」「まづ阿弥陀仏の本願の力を振り処としないといふことと、やはり自分の思いを当てることとをわけます。別といふはひとつなることをふたつにわかちなすこととはなり、解はさるといふこととくといふこととはなり、念仏をしながら自力にきとりなすなり。かるがゆえに、別解といふなり」。念仏しながらあれこれ解釈するわけです。ふたつにわかちといふのは要するに「いふ事と悪い事です。念仏をしながらもこれは本當の念仏、これは本當でない念仏などと、自分の思いをどう分けていくのです。あれは立派な念仏者、これは立派ではない」と全部自分の思いで決めつけていく。証りと「こに言われていますが、これは本當の証りではありません、自分なりの解釈です。それが正しいと信じて疑われないあります。

最後に「また、助業をこのむもの、これすなわち自力をばげむひとなり」。助業といふのは称名念仏以外のことで、たとえば経典を誦誦し、仏様の世界を観察し、それから礼拝、讃嘆供養、これが助業と言われるものですが、これはお念仏を助けることになるとおっしゃるんです。しかし、それで救われるのではないといふことが大事です。例えば、お内仏にお参りすると「こに言います、これはきわめて大事です。それによって本當の教えに出会ふことと縁になるわけですね。お盆にお参りしなくないとか、お彼岸にお参りしなくないとか、そのついでを言つて必要はありません。せいぜいお参りしたらいい縁になることもあります。しかし、お盆にお参りをしていくことと念仏の救いにあずかることは別問題です。そこがはつきりしませんと、結局お内仏にたくさんお参りしたから救われるんじゃないかといふことに必ず落ち込んでいくわけです。それをまとめて次のようにおっしゃってくださいます。「自力といふのは、わがみをたのみ、わが「ころをたのみ、わがちからをばげみ、わがたまごまの善根をたのみひとなり」。親鸞聖人にとって自力といふのは、決して自分の力といふ意味ではありません。他力といふのも、これは他人の力を当てにするといふことではありません。

自力といふと「自分の力」だと、すぐに解釈されてしまいます。だから自力を捨てよといふと自分で何もしないといふだと思われがちですが、違つのです。自力といふのは、我が身を頼む事だとまで言われます。まづ、身体が元氣であるとか、自分はきれいであるとか、人一倍よく動くといふことを当てることと心のことを。だから、それは逆に私たちを縛っていくのです。自分で何もするなといふこととはなく、当てることと苦しいことです。それが自力の問題です。我が心を頼むといふのは、自分は真面目であるとか、人一倍心がけがよいといふことを当てることと、ところが自分は真面目だと思っている人は、不真面目な人を見るともの凄く批判をしますね。自分は責任感が強いと思っている人は、無責任な人にはもの凄く冷たいですね。これが私たちの心の

構造です。自分が当てにしているものにまつて人を切っていくみます。これが自力の問題なんです。「わがちからをばげみ わがさまさまの善根をたのむ」といつのは自分の努力を積み重ねることにまつていつことをしてきたといついことです。現代風に言えば、いろいろな業績を積み上げてきたことを誇るのです。つ。「わが私たちの自力の本質です。だから誇る」といって、自分には値打ちがあると思つわけです。誇るものがない人を見ると、意味がないと決めつけていきます。

この物差しは人を計るだけではなくて、最後には自分をも計っていきます。つまり、元気がなくなつてきて自分の考え方が間違つていたんじゃないかとか、今まで自分の積み上げてきた業績が吹き飛ばつたことに出会つたりしますと、自分は生まれてきた意味がないのではないかとか、自分の人生は何だったのかと、自分自身の人生をも否定するような冷たい物差しです。これが自力の問題です。法然上人が念仏とおつじやつたのは、私たちのそつじつ思い込みを破つてくるはたらきが念仏だといつことです。こつすれば助かる、ああすれば助かると言つている発想を破るのが念仏なのです。しかし、その念仏の教えを聞きながら、またもや自分の思いに落ち込んでいくわけです。この在り方を聖道外道だと言われるのです。

ただ念仏せよ

私の思い、自力を破つてくるようにはたらき、それが念仏であるといつことをはつきりさせないと、私たちの上に実現する救いといつてもはつきりしないまつに思います。つまり、私たちは口にする念仏といつ言葉に対して、自分の心を当てにしてやつているから大丈夫だと言つると同様に、多分救われるはずだといつその救いも自分の思い描いたものなのです。だから救いも自分の予定であり、それを実現する方法も自分で思い描いたものです。しかし、それが本当の救いであるか。また、その救いが本当に実現するのかどうか、一回根本から問い返して見る必要があるといつことを、法然上人 親鸞聖人から語りかけられているのです。

「ただ念仏して弥陀にたすけられまじらすべし」といつおことばがありますが、「ただ念仏せよ」といつことを教えにおいて、どんな時代でも誰の上にも成り立つ平等の救いが実現するのだといつことを、法然上人から学びとられたのです。法然上人は「ただ念仏せよ」とおつじやつたんですが、親鸞聖人の受け止め方が本当に大事だと思ひます。親鸞聖人の受け止めは一言でして、「しかるに愚禿 釈の鸞、建仁辛の西の曆、雜行を棄てて本願に歸す」とおつじやつしました。これは法然上人の教えに出遇つたとき、自分の上に起つた大きな決断ですが、これを「雜行を棄てて本願に歸す」とおつじ

やるのです。雑行といつのはいろいろなものを当てにして、それによって自分の救いを自分で思い描いているあり方ですね。「うっだから自分は大丈夫だろうとか、これを持って限りの限り自分は満足した人生を送れるだろうとか、いろいろなものを知らず知らず持ち込んでしまっているわけですが、それを棄てて本願に帰して生きる。これが二十九歳の時の決断として自ら書かれています。もちろんこの文章をお書きになったのは後々の事ですので、今申し上げた法然上人の教えがなかなか伝わらないことを受けてこの表現になったと思います。普通で言えば「雑行を棄てて念仏に帰す」とか「雑行を棄てて正行に帰す」といふ言葉の方がいいでしょうが、いろいろな念仏に対する誤解があったものですから、「はい分かりました。ただ念仏します」とおっしゃらずに「雑行を棄てて本願に帰す」となっています。「これが、ただ念仏といふことの内容をよく語ってくださった」と思っています。つまり法然上人のおっしゃる「ただ念仏」といふのは、雑行を棄てるといふことを内容とし、さらに本願に帰して生きるるといふことを内容にしているわけです。「このことが確認されないと、ただ念仏の教えに生きます」といふら言ってみても、自力の世界に落ち込むことになっていくのです。法然上人のお弟子がたくさんおられた中で「うっうっ受け止め方をした人は、そうありません。」

「本願に帰す」といふことは「うっうっ」といふことか、どんな生き方がそこから始まるのでしょうか。本願に帰したところに始まる人生、それを親鸞聖人は「往生浄土」といわれます。『教行信証』の証巻に、本願に生きるとは「うっうっ」といふことを、真実の証といふことで述べてくださっている部分です。

宗聖典二八二頁)。ここに親鸞聖人の考えておられる救いがよく表れています。少し難しい言葉かと思いますが、もともとは「浄土論註」といふ曇鸞大師のおことばです。「ここに浄土といふのは功德だと言われます。私たちは浄土といふところの場所だと思いがちですが、浄土に生まれるといふことは、そういう功德を受ける生き方として曇鸞大師はおっしゃいます。つまり、死んだ後に別の世界に生まれ変わって他の世界に行くのではなく、本願に触れるところに「うっうっ」功德を受けて生きていく。そういう人生が始まるのだといふことを「莊嚴功德成就」といふことばであらわされます。」

その中、今「莊嚴主功德成就」を取り上げたいと思います。かの安樂浄土は正覚阿弥陀の善力のために住持せられたり。いかんが思議することを得べきや「つまり、浄土といふのは阿弥陀の善力に住持されている世界だといふのです。どこかにあるのではなく、阿弥陀によって持たれている世界が浄土といわれているのです。どう持たれるかといえますと、「住は不異不滅になづく。持は不散不失になづく。不朽薬をもって種子に塗りて、水に在くに蘭れず、火に在くに焦がれず、因縁を得てすなわち生ずるがごとし、何をもつてのゆえに。不朽薬の力なるがゆえなり」と、「これは譬えです。決して朽ちることがない薬を種に塗れば、火の中に入れても焼かれることなく、因縁を得て芽を出す。それは種の力ではなくて、朽ちることがない薬を塗ったからだといふ譬えです。その譬えで何が言われているか、それが次に続きます。「もし人ひとたび安樂浄土に生ずれば、後の時に意に三界に生まれて衆生を教化せん」と願ひて、浄土の命を捨てて願に随いて生を得て、三界雑生の火の中に

生まるといふことも、無上菩提の種子畢竟して朽ちず。何をもつてのゆえに。正覚阿弥陀の善く住持を径るをもつてのゆえにと」といふお言葉であります。

安楽浄土に生まれるといふのは決して自分一人が楽をしたいから、お浄土にいれていってくれといふ話とは違つ、といふことが押さえられております。それはひとたび浄土に生まれた者は、逆にこの迷いの世界に生まれて衆生を教化するといふ。このいふ課題を担うのだといふことが書かれています。『大無量寿経』の中にもすでに出てくるのですが、浄土といふのは決して私たちが個人的に楽になるために行へるのではなくて、そのいふ世界にひとたび触れるといふような問題の真只中に戻って行く、そのいふ願いをもし存在となるのだと言われています。それが、いろいろな問題がおこって火が燃えさかしている中に生まれても、菩提を求めて行く種は決して朽ちるということがないと書いているのです。大事なのは浄土だけが阿弥陀によって持たれていふことは書いてないといふことです。ひとたび、浄土に生まれたならば、どんな問題だらけの娑婆世界に帰ったとしても、菩提を求めて生きるといふその種は朽ちるということがないと書かれています。なぜなら阿弥陀によって持たれているからだといふのです。もう少しいいますと、阿弥陀によって持たれて生きるといふことが、浄土にひとたび生まれたるにたまわる功德だといふのです。決してその人が強い精神力をもっているとか、特殊な心構えをもつていふかひてはありませぬ。阿弥陀仏の力によるのです。これが親鸞聖人のおっしゃる救いの内容です。迷いや苦しみのいふような矛盾や問題の起る真只中であつて、まわりの人と共に迷いを超えていへ、そのいふ課題を担う者にならぬといふことが救いなのです。

本願の眼

「いふいふことをみるや、いふ濁世末代の目足」といふ言葉がありますが、本願といふのは私たちの目であり足であると言つてもいいと思います。私たちは自分の目で見ると、自分にとって良いか悪いか、得か損か、利用価値があるかないかと、すべての物を見ていくわけです。ひとつの問題に出会つても、その問題の根本を押さえるといふことはなかなかできません。自分の都合のいいように変えよつとしたり、関わりたいくない問題には線引きをして無視してしまつてしまつてあります。問題を見つめていく根本の眼です。それをいただくのが本願の教えです。教えによつて現実を知らせられ、知らせられたところに自分にとつて都合がいいか悪いかを超えて、初めてその現実に関わっていくわけです。『足』といわれますが、具体的に歩んでいく勇気が与えられることだと思ひます。私たちは褒められるのは大好きですから褒められることには一生懸命になれるんですが、あまり評価されないとすると頑張りがないといふことがあります。誰かが見て褒めてくれるなら頑張る気がするといふわけはです。逆に褒めつてくれない人は褒められないといふのです。ところが、それが本当に大事か

どこかを確認していく眼とつのは、私たちの中からはなかなかおきてきません。そのことを確認させてくれる問い返しを、本願の教えによつていただくわけです。だから知らされた時に初めて問題の中を生き抜いていくような力が湧いてきます。それが「莊嚴主功德成就」で言われていると思います。

もう一つ、読んでおきたいと思います。「こも大変よく読まれますが、「莊嚴眷屬功德成就」です。眷屬とつのは仲間、自分のつながりあるものという意味です。私たちの世間はごつながっているかという「お、お、お、その」の雑生の世界には、もして胎、もして卵、もして湿、もして化、眷屬若干なり、苦楽万品なり、雑業をもつてのゆえに」といわれます。生まれ方はバブバブ、いろいろな生まれ方がありますが、それぞれがそれぞれの生まれ方によつて仲間を作っているわけです。人間に生まれれば普通人間のどこしか考えませんね。人間は生きている人間のどこしか考えられないような構造になつていきますね。これが「眷屬若干なり」ということです。人間同志でも民族の違い、文化の違いで争いをします。違つ者は自分たちの仲間ではないという争いが起つたりします。全部が私の仲間だといつ世界観が開けないのです。それによつて苦楽もバブバブだといえます。世界が違えば苦しみといつても楽しみといつても違つわけです。文化によつても違つます。それが「雑業をもつてのゆえに」と言われます。みんなそれぞれの業をもつて生きておりますから、バブバブな世界とつのはなかなか認められません。自分の発想を人に押しつけようとしています。また、男であるとか女であるとか、そつ

ついろいろなものでバブバブになつていくとつのが、私たちの世界の姿として言われております。

それに対して「かの安楽国土は」といわれます。「われ阿弥陀如来正覺淨華の化生する」ということあることなし。同一に念仏して別の道なきがゆえに。遠く通ずるに、それ四海の内みな兄弟とするなり。眷屬無量なり」といわれます。これは仲間が数限りない無量だといつことです。皆が自分と関係している。仲間でない者はない。もつとつと自分にとって都合が悪い者も、自分の関わりなのだといつ視点が開けてくる。「これが本願が照らし出すいのちの世界です。だから本願に帰すといふのは、私たちにとつて案外都合が悪いことなのかも知れないですね。問題だらけの人生を、ある意味で抱えて生きていくといつていじょうじょう。だから、問題があること、さまざまなもの全部つながつていじょうじょう、これが私たちの現実だといつて、自分自身の事実だといつことを教えてくださるのが本願の眼だと思えます。本願によつて私達自身が知らされるわけです。こんな関係を生きていったのが。」

もう少し具体的に見てみましょう。「ご承知のよつに法然上人のただ念仏の教えは国を乱すといつこと、朝廷の決裁により、法然上人は土佐に親鸞聖人は越後に流罪になりました。親鸞聖人は法然上人が亡くなつたあと京都へ戻らずに関東の方お出でになります。ところが関東でもただ念仏の教えは危険思想だとにらまれるんですね。「これにはやはり理由があると思います。ただ念仏に生きる人たちは、日本古来の神々を拝みません。神々を当てに生きていけない力を、

教えによって得ていたからです。権力者が力で押さえつけようとしても、押さえつけられないような、うねりのような念仏があったわけです。権力を求めている人は権力者に弱く、お金を欲しいと思っている人は金持ちに弱く、名声が欲しい人は有名な人に弱く、血筋を重んじる人は天皇に弱いですよ。やはり人間は欲しいものには弱いものです。ところが念仏者というのは、そんなものが人間の値打ちを決めるものではないと、突き抜けているところがあります。力をもってしても、金をもってしても、血筋をもってしても、なびかないんですよ。これは力を持っている人にとっては、不気味な存在だったと思います。決して念仏集団というのは数は多くないんですが、執拗に弾圧を加えます。

ところがその弾圧を加える人たちに対して親鸞聖人は何とおっしゃるかです。これは世のならば、だといつたですね。この手紙は、親鸞聖人が京都に帰った後も弾圧が続く中で、そういつ弾圧を加える人たちとどう向きあっていたらいいのかといつ関東の人たちからの問いに回答するものです。親鸞聖人のご門徒といつのは、お百姓さんばかりでなく豪族もいて、刀を持って一戦交えようかといつ力のある人もいました。それに対して親鸞聖人は、その土地に念仏を広められないようならば、縁が尽きたと思つて縁のある所でお念仏を広めなさいと言います。つまり争いをして戦いを起こしたからといつて、念仏が盛んになるわけではないと誠められるんです。そして、そういつ弾圧が起つてくるのはお釈迦さまの時代から変わらないことであり、仏法の世界といつのはなかなか

人に明らかにならないものだといつこと、それは「この世のならばだ」とおっしゃいます。さらに当地の地頭や領主が弾圧を加えるのは、理由があることなんだとおっしゃいます。その理由の中味までは書いておられません。要するに、お念仏或いは仏法の大事さを知らないからだといつことです。仏法の大事さが分からないものだから、弾圧を加えるんだと言われていると思います。しかし、仏法は本当に大事ですから、弾圧を加える人にも仏法が伝わるようにお互いにお念仏をしていきましょう。ですから弾圧を加える人に「あわれみをなせ」といつ言葉までおっしゃいます。これが親鸞聖人にとつての「眷属無量」といつことの実践であつたと思います。

私ども、自分がお念仏に出会つたことと喜ぶことも、出会つてない人を見るとどうでしょうか。念仏すると念仏に出会つたのは自分の業績のように勘違いし、出会つてない人を見て馬鹿にしたり、あの人はまだまだだと言いませんか。ましてや自分に弾圧を加えてくる人は、憎たらしい敵としか思わないですよ。しかし、親鸞聖人は自分が仏法に出会えたのは法然上人と出会えたといつご縁によるもので、決して自分の才能でもなければ修行したといつ努力の結果でもないといつんです。縁のためものなんですね。遠く宿縁を慶ぶとおっしゃるでしょう。そこを本当に「存知なものですから、出会つていない人を見ても、まだ宿縁が整っていないのだ」といつ眼で接していかれたわけです。たまたま縁が熟してお念仏に出会つたならば、出会っていない人のためにお念仏の道をすすめていきますよ。といつんです。「それを支えていたのはやはり本願によって教えられた、眷属無量」といつ世界だと思

います。

「いついつもの見方はやはり私たちからは起ってないんでして、教えによつてそういう関係を生きていくのが私たちであつたか」といつことを、知らしていただくといつことしかないと、思います。だから親鸞聖人は、本当に本願に照らされた我が身を生きようとなさつていかれました。だから「そ先ほど業縁」といつことを出しましたけれども、いろんな関わりを生きているのが我が身の現実なのです。いゝ悪いといつことも決められないのです。ある時代に評価された事が、時代の流れによつて評価されないといつことが非難されることすらあるんです。とつてごう、今度開かれる地球の温暖化防止会議はまさにそのつだと思ひます。「二十年前は便利になった快適になつたといつて皆で評価してきました。でも評価してきた結果、地球全部が壊れていく」といつ中を、とつて生きていくかといつ問題になっていきます。やはり今まで私たちがやつてきたことが間違ひだつたんじゃないかといつ事が、自然の方から厳しく問われているわけですね。それから科学技術を推進してきたといつことは、ある時期は褒められていたんですが、決して褒められることばかりではないわけです。私たちは大体そんな生き方をしています。いしもよかれと思つて生きていくわけですが、そのやつていくことが、時代が変わつてみると、とんでもないことをしているといつこともあるわけです。五十年前は戦争に協力するかしらないか、国民か非国民かと言われた時代ですが、今度は自然環境のことが運動としては盛り上がりつつあります。これは大事なことです。やるべきだと思います。しかし、も

う一方で運動をやっている者は世界を愛する人だと言ひ、やらぬ者を非国民呼ばわりするよつな発想も出ることもあります。これも恐ろしいことです。ですから私たちはいつも、運動や問題に関わつていくことを正当化することが、今度は関わつていない者を切つていくといつ恐ろしさを持つていふのです。そこに親鸞聖人の弾圧する者も切り捨てなかつたといつ発想が、実は業縁といつ人間観に立っているわけなのです。自分のたまたま遇えた仏法の世界が大事であると思ひは思つほど、それを単に主張していくのはななく、出会つていない人も一緒に歩んでいく、その人も見捨てずに抱えていくといつのが、親鸞聖人が業縁を生きられた実際だと思ひます。

私たちは業縁を抱えたくないのです。自分にとつて都合のいいことは引き受けますが、都合の悪いことはやっぱり切り捨てたいのです。でもそれは必ず無関係ではいられません。生きていくといつことは都合の悪いことでも必ずやつてきます。何でこんな目に会わなければならぬのか、といつのは実は我が身に対する認識がまだ浅いんです。私たちがこの社会を生きている限りは、無関係なものなど何ひとつない、そういう関わりを生きているといつことを教えてくださるのが本願の教えです。大事なのは本願の内容です。こういう問題があるのは私たちの現実なんだといつことを知らしていただくのが本願の出合ごしです。

本願を聞く

大切なのは「この問題ある人生が実は誰とも代わる」ことのできない、自分自身の人生であるという事です。「これを撰取不捨」ということばで教えてくださっています。撰め取って捨てない」と。現代風に言えばどんな命も決して見捨てない」という事です。私たちの発想から言えば、問題があればつまらない人生だとなります。しかし本願の教えによって、問題は必ず起るものであって、無数の関係を生きているのが現実だと知らされるのです。問題ある人生がつまらない人生なのでなくてそれが実は誰とも代わる」ことのできない、かけがえのない人生だと知らされるのです。そういつ励ましを与えてくださるのが本願です。

だから本願を聞く」ということは、浄土のたとえがいろいろと説かれますが、それを聞くことであ、自分はこんな世界を生きていたのが」と知らされるのです。その自身は、問題が決して消えないさまざまな関わりを生きている」ということ。とれほど真面目に生きていようとが世間の中で評価されたりされなかつたりする」ともあるのです。それこそ親鸞聖人は念仏しているだけで弾圧にまで会うておられるわけですが、それを「世のならいだ」とおっしゃいます。それがつまらない」とはなくて、そこが念仏を明らかにしていく現場だと立ち上がっていかれたわけでしょう。その現場以外に自分の

生きていく場所はないのです。

「こんなにつらいならもう一回生まれ変わりたい」と私たちは言いますが、生まれ変わることもなかなかできません。辛くても、その現実こそがかけがえのないあなた自身の命を尽くしていく場所だと、励まし呼びかけてくださっているのが本願の教えです。だから本願を聞く」ということは、我が身の現実を知らしていただく」という事です。私はこれをしているから大丈夫だとか、これを手に入れたからもう間違いないはずだとか、「これをしているから私は評価されるはずだとかいろいろあるわけですが、そんな予定は業縁の中であつて飛ぶわけです。しかし、逆に評価されてもされなくてもやり続けないといけない仕事があります。誰かが見ていてくれるからやるんじゃない、それぞれの現場で誰とも代われない命を尽くしていく、これが大事な仕事ですね。これは具体的にはつまらない人生と、いふことを決めつけていく発想との対決といつてもいいです。本願が照らし出すのちに背いているのが口うるの私たちでしよう。業縁を無視して「つまらないければ救われな」と言っているわけです。そうなった人生は値打ちがあるが、ならない人生は値打ちがないと言っているのです。つまり、私たちの思い込みを当てにして、値打ちある人生と値打ちのない人生を決めつけようとしているのです。だから雑行を棄てる」というのは、あれは駄目とかこれはいいと思ひ込んでいくことを断ち切っていくことです。そのことを法然上人はただ念仏といふふうに教えてくださいました。そしてその教えを受け止めた親鸞聖人は、雑行を棄てて生き、本願に帰して生きなければならぬとおっしゃったので

す。

念仏といつのは決して何回称えるとか、勉強して称えたら立派なお念仏とか、そうではないでしよう。そのいつ発想そのものが棄てられるおきものだと知らしていただくのがお念仏の申身です。「いつでなければならぬ、ああでなければならぬ」といつ思いが破られると同時に、本願が教えてくださるおつないのちの世界を取り戻さなければならぬ」といつと、「このいつが念仏において知らされるのです。宗祖は「雑行を棄てて本願に帰す」といわれました。私たちにはお念仏といつてもこれが無いわけです。結局この決断がないものですから、ナンマンダブ・ナンマンダブと言いつながら、何遍言ったら助かるだろつかとか、勉強した方が本当の念仏じゃないかとか、そうやって自分を誇るための念仏になつていくわけです。

親鸞聖人が誠められるお言葉でいいますと、「智眼くらしとかなしむな」とか、「罪障おもしとなげかざれ」といつと和讃のおことばがあります。私たちは仏法に縁を持ちますと、何遍聞いてもわかりませんとか、どれだけ聞いてもわかりませんとか、私のような者は駄目なんじゃないでしょうかとか、「いついつに決めつけをします。でも駄目じゃないか」といつ意識は、本当はいい者になりたいつ意識です。ね。やっぱり自分を誇りたいわけでしょう。だから智眼、智慧のまなこが暗いついつ嘆き悲しいものは、実はいい者になれないと言いつているのです。罪障が重い、罪が深いと嘆くのは罪を消してきれいな者になつて救われたいといついつの裏返しですね。しかし、大事なものはそ

なことを嘆くことにはありません。本願の教えによつて私たちがどいついつのちを生きているのか、無数の関わりを生きているの世界を知ることです。それを教えられたからと言つて問題が好きになるといつわけにはいきません。けれども問題があつてもそれは自分の人生の内容であつたのかといつことを受け止める眼と勇氣が与えられるのです。それに励まされながら歩いていくというのが實際だと思ひます。だから念仏して生きる、これが常に雑行と決別し、本願を依り処として生きていくといつ内容を持つていけるといつことが確認されないと、親鸞聖人当時から多くの人が誤つてきたおつに、また自分を誇る道具になつてしまつてます。

今日は信心までいきませんでした。最後に敢えて一言でいいますと、本願を念ずることによつて知らされる、これを親鸞聖人は深信自身とおっしゃいます。これは決して親鸞聖人が自分で思いついたことではなく、教えによつて知らされた内容だとおっしゃいます。一般的には機の深信と法の深信と言われますが、ひと言でいつと我が身がはつきり分かつたといつています。自分に起つた目覚めです。ああそつだつたのか、こんないのちの世界があつたのかといつ目覚めです。自分にはつきりおつた目覚めですが、自分がおつたとは言えません。教えによつて知らしていただいたのです。だから今度のテーマですが、如来よりたまわりたる「と親鸞聖人は表現なさつていられるのです。この業縁を生きるといつてどが、一番浄土真宗の教えの大事とこらだと思ひます。

如来よりたまわりたる信心

一九九七（平成九年）十二月二日

近畿連区事前学習会講義録

文責 大阪教区坊守会